【初年】３回目

３回目の授業はこのページからです。

授業科目　　〖三つの礎〗その(2)五行説

・【初年】３回目〖三つの礎〗その(2) 五行説 01

(2) 五行説 ごぎょうせつ

木星が発見されて〔１２〕いう数字に注目するきっかけになりましたが、当時発見された惑星はほかにもあります。木星のほかに「火星・土星・金星・水星」これら４つの惑星(わくせい)もほぼ同時に発見されたのです。

木星のほかに、火星・土星・金星・水星も発見された。

この５つを五惑星としたわけです。

五惑星（ごわくせい）

当時は望遠鏡などありません。

現在（いま）の時代では……天王星（てんのうせい）・海王星（かいおうせい）・冥王星（めいおうせい）などの惑星が発見されていますが、当時、肉眼で見ることができた惑星は五つだけでした。

☞ 当時の人達の感覚で――この事象について考えてみましょう。

夜空を仰ぐと、何千・何万の星があるのに、何故なのか、この五つの星だけは、ほかの無数の星とは違う方向へ移動します。星を観察していた人にすれば、その動きはとても不思議な事象であり、五惑星は特殊な星だったわけです。

これら五つの星だけは、ほかの星に比べて、ひときわ明るい星でした。そして、ほかに数えきれないほどある星の動きとは、まったく異なる動き方をしている特別な星だということがわかったのです。

当時の人たちにしてみれば、夜空をあおぎ見ると、きらきらと無数の星が輝くなかに、五つだけ特別な星がある。

これは「天がなにかを教えてくれているのでは……」そのような感覚にとらわれたことでしょう。

天には五つだけ特別な星がある
↓
天がなにかを教えてくれている

このことがきっかけになった

五惑星（ごわくせい）の「**五**」という数字に、何か重大な意味があるのではないか……？　というふうに考えたのでしょう。

ここで間違えてはいけないのは、当時、肉眼で観ることができた惑星は５つだけです。それだから五行説になったということではないのです。特別な五つの星があるという事象によって、「**五**」という数字に注目するきっかけになったわけです。

天空の無数の星のなかで、５つだけ特別な星があるのは、
「なにか特別な意味があるのでは……？」
「天がなにか、教えてくれているのでは……？」

貴方が夜空に無数の輝きをみたとき、なにを想い描きますか？

〔たとえば〕人間の掌(て)には、指が五本あります。
どの人の掌を見ても、指は５本ずつあるではないか……。

指五本

あるいは、五体満足という表現をしますが、人間の肉体は、五体から成り立っているではないか……。

五体

☞ なにを以(もつ)て…… 五体(ごたい)というのかについては、その人の生年月日を基(もとい)にして、「宿命」を出して、五体に当てはめますと、その人の体内における、どの部分が病気になりやすいのかという占いがきます。

「宿命の出し方」と「病占(びょうせん)」の観方はもう少し後で勉強します。

あるいは、死んだ人のお腹を切り開いて、内臓を腑分して五臓六腑といいますように、誰でも五臓を備えているではないか……。

五臓

五臓というのは、肺臓(はいぞう)・心臓(しんぞう)・脾臓(ひぞう)・肝臓(かんぞう)・腎臓(じんぞう)の五つを意味しますが、どんな人でも、必ず五臓がそなわっている

ということを発見したわけです。

この事柄についても、宿命の観方と併せてご説明します。

あるいは、五感（ごかん）という言い方をしますが、人間には五つの感覚がそなわっています。

五感

五感について、もうしあげますと――。

目で物を見る「視覚」（しかく）

耳で音を聞く「聴覚」（ちょうかく）

鼻で臭いをかぐ「嗅覚」（きゅうかく）

舌で味を味わう「味覚」（みかく）

皮膚で感じる「触覚」（しょっかく） です。

皮膚で感じる触覚というのは、暑い・寒いなどの感覚（かんかく）です。

これら五つを五感（ごかん）といっています。

☞ **本来人間に備わっていない感覚を「第六感（だいろっかん）」といいます。**

五感は人間にそなわっていて、第六感は、本来の肉体にはそなわっていない感覚だという意味で、第六感というふうに呼ばれるようになったわけです。

第六感は「スイックス・センス」という映画の題名にもなりましたけど、考え方はおなじです。
西洋においても「人間に五感がそなわっている」ことは、昔からわかっていたのです。

五色という色の基本は、赤・青・黄・黒・白です。

五色 ⇒ 赤・青・黄・黒・白

原色といわれるのは、この五色だけです。
この５つの色を混ぜ合わせることによって、どんな色でもつくり出すことができます。

ご存知のように……。
〔たとえば〕赤と青を混(ま)ぜれば紫になります。
青と黄色を混ぜれば緑になります。
赤に黒を混合すれば茶色になりますし、赤に白を混ぜればピンクになります。
五つの色を混ぜ合わせれば、どんな色も作り出せます。
しかし……これら５色だけは、ほかの色からは作りだせない色なのです。

そして、五味(ごみ)があります。
昔から中国では、五味といいまして、食べ物の味も五つの味覚しかない。と考えていたのです。

酸(す)っぱい・苦(にが)い・甘(あま)い・辛(から)い・塩辛(しおから)い

酸っぱい・苦い・甘い・辛い・塩辛い、の五つを五味といいます。この五味についても、よく考えて頂きたいのですけど、五種の味以外の食べ物は存在しないはずです。
先ほどの色とおなじです。
この五つの味を組み合わせることによって、どのような味でも作り出すことができるわけです。

甘酸っぱい味として、梅干しは塩辛くて酸っぱいし、両方が混ざっている味だと思います。
甘辛(あまから)いという味もありますし、辛くて酸っぱい味もあるでしょうし、苦(にが)くて酸(す)っぱい、味もあるでしょう。

五味を混ぜると、どんな味でも作り出せますが、基本的には、この五つの味しかないはずです。

あるいは、

五季節 ⇒ 春・夏・秋・冬・土用（どよう）

実は、季節も、春・夏・秋・冬の４つの季節のほかに、土用（どよう）という季節を中国では考えていました。
この土用についても、後で詳しくやりますけど、季節にも五つの季節があると考えていたわけです。

あるいは、五方向……。

五方向 ⇒ 東・西・南・北・中央（ちゅうおう）

方向も一般的には「東西南北」と表現しますが、東西南北といっても“中央がどこなのか”を決めなければ、東も南も語れないではないか……と考えたのです。
そこで、東西南北に『中央』という方向を入れました。
方向も基本となる方向は、この五種類だと考えたのです。

〔たとえば〕日本は、東洋だといわれています。
東のほうにあるといわれています。しかし、ハワイのほうから見れば日本は西です。アメリカから見たら西です。

では「日本は東にあるのか西にあるのか」といわれたら、中央がどこなのかを、決めてからでなければ、東も西も語れないはずです。〔たとえば〕北海道は北のほうにある。と、日本人ならいいますがロシアの人たちから見れば、北海道は南にあるわけです。
つまり、中央がどこなのかを、決めなければ、南も北も語れないのです。
それゆえに、方向をあらわすときに、この『中央』というのは、基点は欠くことのできない重要な方向なのです。
このことは、あまり知られていないと思いますけど……。

五本能（ごほんのう）

五本能というのがあります。
“人間には五つの本能がそなわっている”と、昔の中国では考えていたのです。
「五本能」は、算命学で占うときに、とても重要になります。

五本能〔習得本能・魅力本能・伝達本能・攻撃本能・守備本能〕についても、のちほど勉強していきますけど……
生年月日を基にして、自分あるいは他人（ひと）の宿命を出して、その宿命を観たときに、「自分は何本能が強い」とか、

「あなたは――何本能が強くて、何本能が弱い」とかを、読み取る・割り出すことができます。

✏ ……挙げていけば、きりが無いほど５つの分類があります。
人間には指が五本あり、肉体も五体がそなわっている。
内臓にも五臓があり、感覚にも五感があるというように、人間の肉体も、精神も、感覚も、なぜか五つのものからできている。
「これは偶然(ぐうぜん)ではない」というふうに考えたわけです。

人間の肉体も、精神も、感覚も、五つの種類のものから成立っているのであれば――。
“人間も自然物(しぜんぶつ)であるはずである”とした、自然思想(しぜんしそう)という考え方があります。(たびたびでてきていますね)
“人間は自然の産物の一つである”という考え方です。

〔たとえば〕人間に指が５本あるのは、人間が決めたことではないはずです。人間の指を、なぜ４本にしなかったのか、なぜ６本にしなかったのか……、指が五本あったり、五体があったり、五臓があるのも、これらは全て自然が決めたことでないか、と、考えたわけです。

人間の肉体も、精神も、感覚も、五つのものから出来ているとすれば、自然界そのものが、五つのものから成立っているのではないだろうか。そういう結論に達したのです。

✏ 自然界は五行(ごぎょう)で成り立っている

自然界そのものが、元々(もともと)五つの性質のもので成り立っている。それゆえに、自然の産物である人間も、肉体や精神や感覚が五つのものから出来ていて、それが形になったのではないか……そんなふうに結論づけたわけです。

五行というのは、木性(もくせい)・火性(かせい)・土性(どせい)・金性(きんせい)・水性(すいせい)、これら五つを意味します。

五行 ⇒ 木性・火性・土性・金性・水性

自然界を調べると、自然界は〔木性・火性・土性・金性・水性〕これらの五つから成立っている。そのように結論づけました。

“自然界は五行で成立っている”という考え方を「五行説」といいます。

五行説 ⇒ 木性・火性・土性・金性・水性の五つで成立っている。

この五行を音読するときには……。

木性（もくせい）、火性（かせい）、土性（どせい）といいますけれど、

天空の星である木星（もくせい）、火星（かせい）とはまったく違います。

木性とか火性のほうは、星ではなくて資質（ししつ）・性質（せいしつ）です。

この「性」という文字には「天から与えられた本来の質」という意味があります。

五行を続けて読むときには〔木火土金水（もっかどごんすい）〕といいます。

木 火 土 金 水（もっかどごんすい）と呼ぶことが多いです。

ゆえに、木火土金水（もっかどごんすい）と覚えてくだされば大丈夫です。

昔の中国の人は「自然界は 木（き）と火（ひ）と土（つち）と金（きん）と水（みず） によって出来ている」きっとそのように考えていたのではないか？

と、現代（いま）の人たちには、思われてしまうことにもなるかも知れません。

ところが「五行説」はそのように単純ではないのです。

〔たとえば〕木性といえば“木の性質のもの”という意味になります。

木性 ⇒ 木の性質のもの

性質	五行
木の性質を持つもの	木性と言っている

☞ 以下……おなじです。

火性(かせい)といえば、火(ひ)の性質のもの、土性(どせい)といえば土(つち)の性質のもの、金性(きんせい)は金(かね)の性質のもの、水性(すいせい)は水(みず)の性質のものです。

つまり、木(き)の性質のものならば、すべて木性(もくせい)のなかに分類されます。

〔たとえば〕木(き)にもさまざまな樹木がありますが、松の木も木性なら、杉の木も木性ですし、毎年・花を咲かせる桜や、梅の木も木性ですし、林檎(りんご)の木、蜜柑(みかん)の木とか、果物をつけるような木も木性です。

あるいは、もっと小さなものでしたら、その近辺(きんぺん)に生えている草(くさ)も木性に入ります。

チューリップとか薔薇(ばら)、菊のように、花を咲かせる種類も、五行で分類すれば木性に入ります。

人間が食べている稲(いね)の実(み)とか麦、お米、これらも、五行で分類すれば木性に入ります。

野菜もそうです……大根も人参も分類すれば木性のなかに入ります。つまり、自然界に存在する木(き)の性質を有するものは、すべて木性(もくせい)のなかに分類します。

☞ おなじく、火性(かせい)といえば、火(ひ)の質のものは、すべて火性のなかに分類されます。

火と書きますので、燃えている火炎(かえん)は全て火性に分類されるわけですが、火性にもいろいろな火があります。

〔たとえば〕自然界で一番大きな火性といえば太陽です。太陽そのものを分類するといえば、火性に分類されます。

また、地上で燃えている火炎にも、さまざまな火があります。木が燃えても火性ですし、紙が燃えても火性ですし、ガスコンロのガスが燃えていても火性ですし、アルコールが燃えていても火性です。

あるいは、火山が噴火して流れた溶岩(ようがん)の火も火性です。

落雷によって、火事が起こったりすれば、雷は電気ですけど、電気の火花も火性に分類されます。自然界に存在する物質で、炎のような火はすべて火性に分類されます。

✏ おなじく土性に関しても、土(つち)の性質をもつ全てが土性のなかに分類されます。

地面そのものは土ですが、土にもいろいろな土があります。

田圃(たんぼ)や畑の耕作に適した肥沃(ひよく)な土壌(どじょう)も土性です。

カサカサに乾燥した砂漠のような土地も土性です。

関東ローム層のように、粘土質で粘り気のある土も土性に分類されます。

あるいは、土がたくさん集積して、大きく盛り上がってくれば、それは山になります。分類すれば土性になります。

海底や川底の土や砂のように、湿っている土や砂も土性です。自然界のありとあらゆる土の性質のもの、すべて土性のなかに分類されます。

✏ 金性は（金の性質）と書きますが、基本的には金属とか鉱物を指しています。

金の性質を有するものは、すべて金性に分類されます。

〔たとえば〕金、銀、ダイアモンド、ルビーとかの貴金属・宝石類も、この金性のなかに分類されます。

人間が道具としてつかっている鉄、銅、アルミニューム、ガラスとかの鉱物類は、すべて金性のなかに含まれます。

ダイヤ、サファイア、キャッツアイ、それらの高価な石を“宝石”といっていますが、その辺(あた)りに転がっている石ころも金性です。
高価である、高価ではない、この価値観は人間が、それらの物質に値打ちをつけているわけです。
自然界では、宝石も石ころもおなじ価値として考えます。

教室で使用しているホワイト・ボードは、何に分類されるのかといえば、アルミニュームで作られているそうですから、金性に分類されます。
自然界に存在している､ありとあらゆる金性の質のものは、すべて金性のなかに分類されます。

✏ 五行(ごぎょう)〔木火土金水〕の最後の水性ですが、自然界のなかで、水の性質をもつ液体は全て水性に分類されます。
水といいましてもさまざまな水があります。
自然界における一番大きな水（大量の水）は海の水です。
海を五行で分類すれば、水性に分類されます。
湖も水性、川も水性、雨水も水性です。
あるいは、人間が飲んでいるジュース、お茶、コーヒー、

それらを五行に分類すれば水性になります。
山の湧き水とか、井戸水のように、透き通ったきれいな水も水性ですし、沼地の泥水のように濁った水も水性です。
あらゆる水の性質の液体は水性に分類されます。

このようにして、自然界のさまざまな物質を五つに分類しました。
……自然界において、五行に分類できないものは存在していない。という結論に達したのです。

「五行に分類できないものは、自然界には存在していない」

後ほど勉強しますが……木は燃えると火になります。
木は火の作用で燃えつきて、灰になって土にもどります。
土は固まると金性になります。
五行の〔木火土金水〕というのは循環しているのです。
つまり、木性は永久に木性という姿ではなくて、木性という物質が、火性の質になるとか、土性の質になるとか……変化していきます。
土が固まって、石とか岩の状態になったときには、金性に

分類されますけど、その塊(かたまり)が何かの種類の鉱物になることもあるわけです。そうなると金性に分類されます。
土の状態のときは、土性に分類して、塊(かたまり)の物質になったときは金性に分類することになります。

“五行に分類できないものはない”といいましたけど、人間を何に分類するべきだとおもいますか……？
算命学は、人間は五行〔木火土金水〕すべてをそなえた存在である。というふうに考えています。
五行のなかで、唯一、生命が宿るものは木性です。

✏ 自然界に存在する物質は、すべて五行のなかに分類できるという考え方が五行説(ごぎょうせつ)です。
当時の賢者は、五行〔木火土金水〕のすべてを備えた存在……それは人間ではないだろうか、と考えたのです。

その証(あかし)として、先ほど申しあげましたように、人間の指は五本あり、肉体は五臓、五感とか、そして五本能を具備(ぐび)しているのは、そのあらわれの姿である。と考えたわけです。

人間は五行のすべてをそなえている

「人間は自然界の産物の一物(いちぶつ)である」という、この考え方が自然思想(しぜんしそう)です。
そこでは「人間も自然界の一員である」といっているわけです。
自然界そのものが〔木火土金水〕の五行で構成(こうせい)されているのであれば、自然の産物である人間が、五行を備えているのは、自然な成立ちであるといえます。
そのように考えることができます。

「自然界のなかで、最も五行のバランスが取れているのは人間である」という帰結です。
それゆえに、占いをするときには、その人の宿命を五行であらわして観ることが多いのです。

〔たとえば〕「あなたの宿命は木性が多い宿命です」とか「火性が多い宿命ですね」「土性ばかりですね」とか――「五行のすべてが備わっています」とか、そのように観てゆくようになります。

それらの基(もとい)になっている考え方が「五行説」です。

✏ 五行説についてですが――。

現代(いま)の人たちは、数学で十進法をつかっています。

１～１０までの十進法によって、数字を表していると思いますが、その十進法の元になったのが、この五行説だといわれています。

そして、五行〔木火土金水〕のそれぞれを「陰(いん)」と「陽(よう)」に分けて、１０種類に分類するという考え方に繋(つな)がってゆきます。

五行説をもちいた具体的な占いなどは、これからたびたび出てきます。

その都度(つど)……皆様には五行説の考え方を、より深めていただきたいとおもいます。

【初年】３回目〖三つの礎〗その(2)五行説(ごぎょうせつ)　終わります

つぎの授業 ⇒【初年】４回目 〖三つの礎〗その(3)陰陽論(おんようろん)